

本間義人さんの国土計画論評 - 追悼

東京大学・豊橋技術科学大学名誉教授、一般財団法人国土計画協会会長 大西 隆

お盆の時期でもあり、追悼の想いで本間義人さんについて書くことにする。とはいえ、筆者は本間さんの人物、業績を十分に存じ上げているわけではない。したがって、よりフォーマルな追悼記は、適任の方が、然るべき場を使ってお書きになっているのではないかと思う。筆者の場合は、これから記すような経緯で、やや一方的にご縁を感じてきた者として業績のごく一端を紹介することに留まることになる。

本間義人さんとはどういう方か？ ウィキペディアや著作にある経歴や著作歴を手掛かりにすると、本間さんは1935年7月に東京で生まれ、今年1月12日に86歳で亡くなった。本職という表現が適当とすれば、毎日新聞の編集委員であった。早稲田大学文学部を卒業後、数年して入社されているようだから、新聞社では早いうちからここで取り上げる専門分野を持った記者として仕事をされていたのではないかと思う。50代の終わり、1994年から九州大学大学院比較社会文化研究科教授、99年からは新設準備中の法政大学現代福祉学部に移り、2006年に70歳で定年退職し名誉教授となった。

ご縁を得たのは、筆者が1980年9月に最初の単著『地域交通をあるく』（山海堂）を上梓したところ、本間さんから連絡があり、インタビュー記事を毎日新聞で取り上げてくれたからであった。多分、出版後間もない頃、80年暮れのことではなかったのかと思う。新聞社がある一ツ橋のパレスサイドビルに伺って話を聞いて戴いたように記憶している。しかし、筆者は、当時、大学院を終えたばかりだったこともあり、その後は本間さんの取材対象となることはなく、仕事上の接点は恐らくこの一度だったように思う。本間さんが大学に転じたり、著作を出版したのは承知していたものの、お目に掛けてお話する機会のごく僅かに留

まったまま、今年を迎えてしまった。

実は筆者は、10年間程、都市計画や国土計画という本業の中断を余儀なくされていた。最近になって解放されたので、改めてこれらを学び直そうと思い立って手にした中に、買い溜めてあった何冊かの本間さんの著作があった。それらを読みながら、インターネットで検索していたところ計報に接することになった。手元にある本間さんの本は5-6冊だが、実は膨大な、と表現すべき著作を、しかも単著を中心に書いてこられた。その多くが国土計画、地域開発、都市計画に関わるもの、つまり筆者の関心と重なるものである。タイトルは似ていても、それぞれ新たな視点と材料で書かれていて、新聞記者という本職から納得できないことはないのかもしれないが、その精力的なお仕事振りには改めて驚かされた。

本間さんと国土計画

30冊を超える単著群の中で国土計画や国土総合開発計画がタイトルに含まれるのは四冊である。

- ①『三全総、動き出した新国土開発計画』教育社、1977年。
- ②『国土総合開発計画 四全総の策定に動き出した』教育社、1983年。
- ③『国土計画の思想 全国総合開発計画の30年』、日本経済評論社1992年。
- ④『国土計画を考える 開発路線のゆくえ』、中公新書、1999年。

当時の国土総合開発計画で策定されてきた全国総合開発計画は、第1次（1962年閣議決定）、第2次（1969年）、第3次（1977年）、第4次（1987年）、第5次（1998年）であったから、④までで第3次全総から第5次全総（21世紀の国土のランドデザイン、との別称が付けられていた）までをカバーしていることになる。そして、④は、新

書版ということで、やや一般向けに、前史から始まって、第5次までの我が国の国土計画の経緯がコンパクトにまとめられ、主張も整理されているように思うので、ここではこの本を読み返してみよう。

前史が序章で、第5次全総までに、順に1章から5章までが当てられ、第6章ではこの時期にホットな話題であった首都機能移転を取上げている。つまり、国土計画について一通りの知識を得たいと読者のために、それぞれの計画に関連したデータも交えながら書かれたもの、というわけである。

国土計画に関する本間さんの論評は、特に第7章以降に現れる。初期の全総は、「日本の経済と社会を高度成長にテイクオフさせるうえで大きな役割を果たしたとっていいかもしれない」（第7章）、しかし公害や地価高騰、伝統的なまちなみの乱開発という傷跡を残した。三全総は国土にインパクトを与えず、四全総は中曽根民活が最後に乗ったことによってバブルを引き起こし、その後の経済社会の混乱の元凶となった。「いずれも計画行政としては失敗であり、その意味で計画行政としてはもはや行き詰ってしまっている」（同）。

ではこれからどうするのか？「それぞれの地方が自らの地域の将来をデザインし、活性化につなげる、…（それを積み上げて）、日本列島をデザインする、そういう時代がきている」（同）とある。

分権型国土計画のリアリティ

地方が自らの地域の将来をデザインし、活性化につなげている分権型の具体例はあるのだろうか？それを論じているのが第8章であり、他の著作でも本間さんが様々に取り上げてきた地域の取り組み事例が紹介されている。神奈川県長洲一二知事の「地方の時代」、北海道檜山地方の厚沢部町の大規模農業主義からの転換と農産品の加工産業の育成、大分県大山町（現在は日田市の一部）特産品創出（一村一品運動）、岩手県沢内村（現在は西和賀町の一部）の地域医療福祉、静岡県掛川市の住民主体の土地利用管理である。それらに共通しているのは、中央の政策に依存するのでは

なく、優先すべき独自の目標を立てて実践することによって、目指す成果を上げようというものであった。

こうして、分権化によって各地で独自の地域政策が実施されるとして、それらがバラバラに結果を生むだけではなく、目標が共通化されること、すなわち「21世紀に私たちが住む国土とはどういうものであったらいいのか」という共通のイメージがあるといいと述べている（終章）。五全総には、「庭園の島」という言葉が使われているものの、抽象的過ぎて実態が見えないと指摘する。しかし、さすがに本間さんも、共通のイメージを表す的確な用語を提示することは難しかったようだ。「私自身の描くあるべき国土像は、自然環境の豊かな、高福祉社会という、ささやかであり、また考えようによってはなかなか高望みな国家、国土である。それがやさしいか難しいかは、私たち自身の生き方とか、国家としてあり方によるだろう。そうした国土における基本的必要条件とはどういうもので、それは数値化できるものであろうか。」と述べる。

そして、どの地域においても森林率や緑被率が高く自然を相手にした第一次産業が成り立つ、住宅・上下水道・公園・義務教育施設・社会福祉施設等生活関連社会資本が整備され住民が快適で安全な生活環境を享受できる、住宅・教育・文化・社会福祉などに関する国と地域の経常的支出が確保され私的消費とバランスのとれた充実した社会的サービスが享受できる、さらに社会保障制度が約束する健康で文化的な生活が実現されるために所得や富の配分の不平等がなくなり過度の社会的不公正が是正されている、と要約している。

ここで本間さんが挙げているような具体的な目標は多くが賛成するものであろう。ただ、その全てが国土計画の目標というのは荷が重い気もする。しかし、これまでの国土計画が少なくともその一部を軽視してきたのではないかというのが本間さんの一貫した主張だったのだろう。その意味で、国土計画は平等な幸福社会の実現とでもいえるべき総合的な目標を追うべきという主張は現代でも忘れるべきではないのだろう。衷心より本間義人さんのご冥福をお祈りします。